静岡県中東遠地区の 6市町5病院の連携による家庭医の養成

静岡家庭医養成協議会

静岡家庭医養成協議会

要旨

静岡家庭医養成協議会は、地域の慢性的な医師不足の解消に向け、静岡県中東遠二次医療圏の6市町が連携し、総合診療医である家庭医を自ら養成することを目的として立ち上げた全国でも他に類がない組織である。現在は、浜松医科大学総合診療専門研修プログラムを主体とし、家庭医療の先進国である米国ミシガン大学とも連携し、「子宮の中から天国まで」をキャッチフレーズに掲げ、全人的・全科的な医療を行う家庭医の養成を目指し活動している。

菊川市・森町・御前崎市においては、それぞれの地域に研修を兼ねた実践の場として、家庭医療センター（クリニック）を整備し、小児から高齢者まで質の高いプライマリ・ケアを提供している。また、地域の医療機関や介護施設、行政等とも協働し、医療の提供のみならず、予防接種や介護・認知症予防事業にも関わっており、健康なまちづくりの中核的役割を担うに至っている。

1. 背景と目的

高齢化社会が進展し、慢性疾患や生活習慣病、認知症等の高齢者医療の需要が高まる中、静岡県中東遠二次医療圏（磐田市、袋井市、掛川市、菊川市、御前崎市、森町）でも、慢性的な医師不足が大きな課題となっていた。2006年度における当該圏域の人口10万人当たりの医師数は、107.5人であり、全国平均の206.3人に対し約半数という深刻な医師不足の状況であった。

当該圏域の急性期医療は、それぞれの自治体病院が中心となって支えてきたが、2004年度から開始された新臨床研修医制度の影響等により、都市部への医師偏在が進んだことで、圏域内の病院勤務医の疲弊がより顕著になっていった。

このため、崩壊しつつあった地域医療を再生することを目的として、静岡県の地域医療再生計画に基づき、2010年に磐田市・菊川市・森町家庭医養成連絡協議会（現：静岡家庭医養成協議会）を設立し「静岡家庭医養成プログラム」を立ち上げた。

2011年には教育診療拠点として、「菊川市家庭医療センター」と「森町家庭医療クリニック」の2カ所の公立診療所を開設した。2014年度から御前崎市の加入により3市1町の構成団体となり、2017年に「御前崎市家庭医療センター・しろわクリニック」も開設された。

2022年度から、掛川市、袋井市も協議会に加わり、静岡県中東遠二次医療圏5市1町すべての自治体が協議会に参加し、地域全体で家庭医養成を支える協力体制が構築された。

当初、家庭医養成の研修プログラムは、

菊川市家庭医療センター

森町家庭医療クリニック

御前崎市家庭医療センター・しろわクリニック

家庭医療の先進国である米国ミシガン大学の支援を受けながらの運用であったが、2014年度からは浜松医科大学に設立した地域家庭医療学講座や同産婦人科家庭医療学講座の指導のもと、「子宮の中から天国まで」を掲げ、全科診療をグループで行う家庭医を育成している。2018年度の新専門医制度移行後は、浜松医科大学との連携をより密にし、「浜松医科大学医学部附属病院総合診療専門研修プログラム」として総合診療専門医の育成を行っている。

2.活動内容と効果

①教育の視点

家庭医養成プログラムは、家庭医として必要とされる専門的なスキルや知識を習得するための研修を提供している。プログラム発足時より米国ミシガン大学家庭医療学講座の支援を受け、家庭医療のスタンダードを習得できる研修内容とし、0歳から100歳超の患者までを診療科の枠に捉われずに診ることを学ぶ内容となっている。

プログラムの研修施設は、中東遠二次医療圏内の公立病院、家庭医療センターを中心として、静岡県内外の16の病院と6つのクリニックの連携によって支えられている。4年間の研修プログラムは、所属する各家庭医療センターでの実践研修に加え、地域の総合病院の協力のもと、内科、産婦人科、外科、整形外科、皮膚科、精神科、救急科等、ほぼすべての専門科研修を受講できる環境を整え、総合的に診療できる家庭医を養成する内容となっている。

米国ミシガン大学　マイク・フェターズ医師

総合病院における研修については、高度急性期機能を有する病院（磐田市立総合病院、中東遠総合医療センター）と回復期機能を有する病院（菊川市立総合病院、公立森町病院、市立御前崎総合病院）の異なる環境での幅広い領域の研修が積めることも魅力となっている。また、医師不足が顕著な中小病院にとっては、専攻医の研修を受け入れることで、救急医療や入院診療をサポートしてくれる医師の確保となることから、受入病院側にとってのメリットにもつながっている。

各家庭医療センターでの実践的な教育では、専任のプリセプターを常時配置し、1症例毎に丁寧な指導を積み重ねている。木曜日の午後には、グランドラウンドとしてレクチャー、ワークショップ等を行う学習会を開催し、指導医、研修医のみならず、多職種が一堂に介する学習会を開催することで、

グランドラウンド（ワークショップ）

プログラムに関わるスタッフ全体のレベルアップを図っている。

現在11名の専攻医が在籍しているが、事業開始以来40名以上の専攻医が研修に参加し、うち27名が研修プログラムを修了し、地域医療の一翼を担うべく家庭医療専門医として全国各地で活躍している状況である。

②地域医療の視点

医師不足と高齢化が進む当圏域では、身近にいて何でも相談にのってくれる医療（プライマリ・ケア）を提供してくれる家庭医が、重要な役割を果たしてくれている。

特に在宅診療においては、訪問診療の研修や多職種連携活動を進めたことにより、地域の在宅診療の重要な拠点として発展し、患者・家族にとっても満足度の高い在宅療養・看取りにつながっている。本事業により、最期まで自宅で療養できる診療体制が実現し、「菊川市家庭医療センター」と「森町家庭医療クリニック」「御前崎市家庭医療センター・しろわクリニック」の3施設合わせて年間150件以上の在宅看取りを行っている。

診療施設は、それぞれに特色のある診療を提供している。「森町家庭医療クリニック」では、精神科医・臨床心理士のコンサルテーションが適宜可能な環境をつくり、教員との密な連携により、クリニックが不登校や発達障害の相談先としての機能を担っている。また、森町は中山間地域であり、小さな子どもを抱えた妊婦が妊婦検診のために遠距離移動することは負担が大きい。そのため、身近な家庭医療クリニックで産婦人科専門医の資格を有する家庭医が妊婦検診を実施し、分娩施設との間で診療情報を共有して産前・産後のケアを連携して行っている。

「菊川市家庭医療センター」では、複数医師体制により、24時間対応できる機能強化型在宅療養支援診療所として地域における在宅医療の中心となって機能している。特に在宅看取りに力を入れており、病院からの終末期患者の紹介に加え、地域の開業医からも紹介を受けている。地域の内科系開業医は、ほとんどが高齢で一人診療体制のため、悪性腫瘍終末期の麻薬等を用いた緩和ケアは一人体制では困難であり、患者をスムーズに引き継げるよう協力体制をつくっている。

「御前崎市家庭医療センター・しろわクリニック」は、地域で不足する皮膚、筋骨格系、女性医療、メンタルヘルスの問題が多く相談されている。御前崎市内には産婦人科の常勤医はおらず、子宮頸がん検診受診率も約40%と低い状況である。女性患者の月経関連問題や更年期症状、老年期の泌尿生殖器系症状の相談も多い。しろわクリニックにはリハビリ設備も備えており、理学療法士4名、作業療法士1名による通院・在宅患者のリハビリテーションも積極的に実施している。

また、各クリニックでは、地域の中学校や高校における性教育の出張講座を行い、望まない妊娠や性感染症予防、HPVワクチンの啓発活動等も行っている。さらには地域住民に対する認知症カフェや人生の最終段階に関する「人生会議（アドバン

訪問診療の現場

産婦人科研修

ス・ケア・プランニング)」の啓発活動にも携わっている。

3.まとめと展望

これまで述べてきたように、家庭医の最も良いところは、患者の年齢・性別・疾患等に関わらず、地域住民の健康を支えることができるという点である。そのため、複数のクリニックや診療科を受診する必要がなくなる。さらに、患者や患者の家族と密接なつながりを保つことで、家族全員の予防・治療・リハビリ等の相談に応じることができる。また、状況に応じて専門医を紹介するのも家庭医の重要な役割とされており、まさに家族全員にとってのかかりつけ医、健康に関するゲートキーパーとなっている。

一方で、家庭医はどんな場所であっても地域のニーズに合わせることができるので、どんな環境でも活躍できるという良さがある。これからは特に人口減少の進む地方において、多疾患併存の高齢者へのケアや在宅看取り、子どもや若者へのメンタルヘルス、出産や育児に関わる女性へのケア、その他の地域に根差した公的な活動等、限られた人材の中で豊かなまちづくりに貢献できる可能性は大きい。

日本の医学界においても次第に総合診療医や家庭医は高く評価されるようになり、それを目指す若い医師は徐々に増加している。しかし、目前に迫っている超高齢社会に十分であるとまでは言えない。静岡家庭医養成プログラムにおいては、2020年度専攻医は3名、21年度専攻医は5名、22年度専攻医は2名、23年度専攻医は1名の合計11名である。また、全国的にみても、総合診療専攻医採用者数は、20年度に222名、21年度に206名、22年度に250名、23年度に285名の合計963名となっている。

この現状を考慮すると、私たち静岡家庭医養成協議会の役割は、単に家庭医の数を増やすことだけではなく、地域に奥深く入り込みリーダーシップを発揮できる柔軟性を備えた家庭医を育てる必要性があると考えている。まずは、地域の開業医や病院の勤務医との間で、利害関係を超越した相互依存を築くことが重要となる。また、地域で働くケアマネや看護師、リハビリ技師、薬剤師等との多職種連携を通して、みんなで地域を豊かにしていこうという機運をつくり上げる。

診療の振り返り

つまり、地域で自分たちの役割が大きくなることよりも、他のステークホルダーの活躍により自分たちの存在感が薄れることの方が、地域をより豊かにすることにつながるのかもしれない。ひとりでも多くの地域住民の幸せを第一に考え、すべての医療介護関連職種が生き生きと働くことができる環境をつくり上げることが、これからの日本の家庭医療の姿だと考えている。

この理想を掲げつつ、「菊川市家庭医療センター」「森町家庭医療クリニック」「御前崎市家庭医療センター・しろわクリニック」の3つの公立診療所が、日本における家庭医療のメッカとして発展を遂げていけるように、中東遠二次医療圏5市1町がこれからも力を合わせて、静岡家庭医養成プログラムを支えていきたい。それとともに、ここを巣立っていった家庭医たちが、日本の各地で理想の家庭医療を展開していくことを夢見ている。